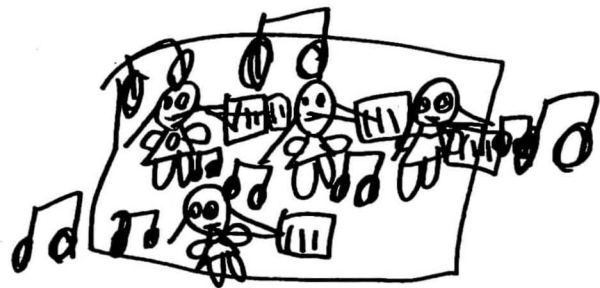
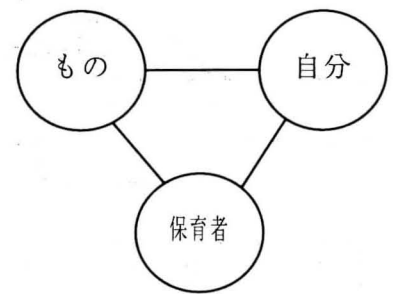


(ア) 子どもが「もの」とかかわる姿から

① 新しい「もの」と出会い、初めてかかわる姿

子どもたちは、新しい「もの」に出会うと、その「もの」に対して興味や関心を持ち、親しみをもってかかわろうとする。保育者は、子どもたちが今、どのようなことに興味や関心をもっているのかを探り、「もの」との出会いを意図的、計画的に行っていくことが大切だろう。

ここでは、子どもたちが「もの」と初めて出会い、保育者と一緒にもものとかかわり、自分らしさを発揮していく姿を紹介していく。



場面	ジュースづくり 1	かかわりの対象	人	もの	自然
----	-----------	---------	---	----	----

これまでの姿

入園して約2か月が過ぎ、子どもたちは自分のしたい遊びを見付けられるようになってきた。梅雨入りして、保育室にある空き箱やペットボトル、ストロー、平テープなどを使って、「剣」や「魔法の杖」などをつくって遊ぶ姿も見られる。

この日の前日、年長児がしている「ジュース屋さん」に招かれ、買い物を楽しむ中で「これ(花紙と水とを混ぜてつくった‘ジュース’)をつくってみたいな」と話す姿から、自分でもつくってみたい、やってみたいという気持ちが膨らんできているのを感じた。

子どもの姿

- 年長児がしているジュース屋さんに出掛け、買い物を楽しむ。

A「ジュースをください」
E「何ジュース？」
A「レモンジュースください」
E「はい、どうぞ」
A「ありがとう」
E「どういたしまして。また来てね！」



- 自分でもつくろうと、必要な素材を考える。

B「Bも、つくりたい」
保「いいよ。つくってみようか」
B「『これ』ちょうだい。これを入れてたの」
保「うみ組さんが『これ』入れてたの、よく見ていたね。花紙って言うんだよ」
B「うん！は・な・が・み」

- Bの遊びに気付き、買い物を済ませた子どもたちも集まってきて、ペットボトルに花紙を入れ、水を加えて遊ぶ。

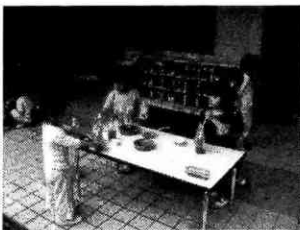
A「ほくもする！」
C「Cもしたい」 D「ほくも！」
保「いいよ」

- Dがペットボトルを振り、ジュースをつくる。

D「先生見て！ジュース！」
保「うわあ、おいそうなジュースができたね。Dくん、どうやってつくったの？」
D「こうしたの！」

- ペットボトルに蓋をし、振ると水とよく混ざること、色を組み合わせを楽しみながらジュースづくりをする。

C「赤と白を入れたのに、白がなくなった！」



保育者の援助

【環境構成】 ペットボトル、平テープなどのほかに、花紙(赤、白、桃)を準備しておいた。

- 保育者もジュース屋さんとなり、子どもたちが手分けして遊びを見守りながら、必要に足りたり、補足したりした。

- 「つくってみたい」という気持ちを受け止め、必要な「もの」を一緒に考えながら、「これ」が「花紙」であることを伝えた。

「うみ組さんが『これ』入れてたの、よく見ていたね。花紙って言うんだよ」

- 子どもたちの「～したい」という気持ちを受け止め、一人一人がたっぷり遊びを楽しめるようペットボトルと蓋、花紙を用意した。

- 振ると水と花紙が混ざり合うことに気付いたD児の発見を共に喜び、周りの子どもたちへの刺激となるような言葉掛けをした。

「Dくん、どうやってつくったの？」

- 子どもたちと一緒にペットボトルを振ったり、色を組み合わせたりして遊びの面白さを共に味わうようにした。

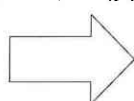
考察

本事例は、「～したい」と自分のしたい遊びを見付けられるようになってきた子どもたちが、年長児のつくったジュースに出合い、自分もつくってみたいと試みながら必要な「もの」やつくり方、色の組み合わせなどに気付いていった事例である。

保育者は、子どもたちと共に遊びを楽しみながら一人一人の発見を共に喜び、受け止めるようにした。また、それぞれがジュースづくりを楽しむ中で、同じ場を共有して遊ぶ友だちの存在にも気付くような言葉掛けに努めた。友だちの気付きが自分への刺激となり、一層遊びの面白さを味わったのではないだろうか。今後も教材研究を深め、一人一人の気付きを大切にしながら、「もの」との出合わせ方も工夫していきたい。

本事例から見られた年少児の自分らしさの広がり

年長児にジュースをつくってもらって喜ぶ姿



自分もつくろうと必要な「もの」に気付く姿や振ったり、色を組み合わせたりして遊びを楽しむ姿

場面	ガムテープって丈夫だね	かかわりの対象	人	もの	自然
----	-------------	---------	---	----	----

これまでの姿
 子どもたちは、空き箱やペットボトル、ロールペーパー芯、ストロー、平テープなどを使って自分がつくりたいものをつくって遊ぶ姿が多く見られる。近頃は、空き箱やペットボトルなど様々なものを組み合わせて、「ロボット」や「銃」など、より大きなものをつくりたいという思いも膨らんできている。その一方で、これまで使ってきたセロハンテープでは粘着力が弱くてつくったものが壊れてしまい、涙を流したり、どうしようかと悩んだりする姿も見られるようになった。

子どもの姿	保育者の援助
<p>○ 空き箱とペットボトル、セロハンテープを使って、ロボットをつくらうとする。 A「先生、できない！」 保「何ができないの？」 A「こう(セロハンテープで貼って)しても、できないの！ぎゅってしたい」 保「Aくんは、ここをぎゅっとつきたいのか…」 A「うん。ロボットつくる！」 保「じゃあ、これガムテープって言うんだけど、これを使ってみようか」 A「うん！」</p> <p>○ 保育者が切ったガムテープを受け取り、ロボットをつくる。 A「くっついた！」 保「くっついたねえ。ぎゅってなってるね」 A「うん！」 B「いいなあ。それなあに？」 A「ガムテープ！」</p> <p>○ Aの遊びに気付き、BやCも集まってくる。 B「ほくもする！」／C「Cもしていい？」 A「うん。こうするんだよ」</p> <p>○ 保育者が持っていたガムテープを取り、自分で切ろうとする。 A「……切れない。あっそうだ」</p> <p>○ はさみを使って切り込みを入れ、ガムテープをちぎって見せる。 A「ほら！」 B「へえ。そうするんだ！」 保「なるほど！そうするとちぎれるね。いい方法だね」 C「すげえ！ほくもやってみる」</p> <p>○ はさみを使ってガムテープをちぎりながら、それぞれづくりはじめる。 C「先生、ガムテープってすごいね」</p>	<p>【環境構成】空き箱、ペットボトル、ロールペーパー芯、セロハンテープなどのほかに、ガムテープを準備しておいた。</p> <p>○ 自分の気持ちを伝えようとする姿や「ぎゅってしたい」という気持ち受け止め、ガムテープがあることを伝えた。</p> <p>○ 保育者も一緒にロボットをつくる楽しさを味わいながら、ガムテープのよさが伝わるような言葉掛をした。</p> <p>「ぎゅってなってるね」</p> <p>○ 子どもたちのやりとりを見守りながら、「～したい」という気持ちを受け止めるようにした。</p> <p>○ A児がガムテープを試行錯誤しながら切ろうとする姿を見守るようにした。</p> <p>○ A児の工夫を認め、そのよさが周りの子どもへの刺激となるようにした。</p> <p>「そうするとちぎれるね。いい方法だね」</p> <p>○ 必要に応じて空き箱やペットボトルを支えたり、ガムテープをちぎって渡したりするなどして援助した。</p>



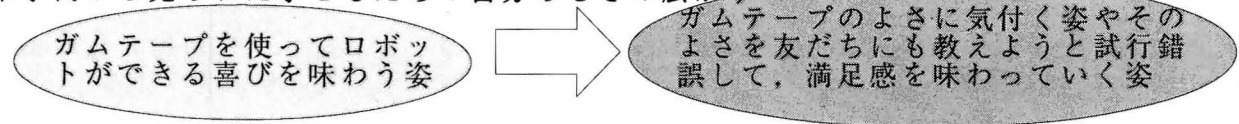
考察

本事例は、自分のしたい遊びを楽しむ中で「もっとこうしたい」という思いを膨らませてきた子どもたちがガムテープに出合い、試行錯誤しながら自分の思いを満足させていった事例である。

保育者は、子どもたちと一緒に遊びを楽しみながら、ガムテープのよさを味わう姿を共感的に認めたり、A児の気付きが周りへの刺激となるような言葉掛けを行ったりした。また、自分でちぎって友だちに教えようとする姿も、そっと見守ったりするようにした。

今後も、子どもたちなりに試行錯誤しながら様々なことに気付いていく姿を大事にして、その気付きをきっかけに友だちとのつながりが生まれていくようにしていきたい。

本事例から見られた子どもたちの自分らしさの広がり



対象児 年中児

記録日 平成20年 6月18日(水)

場面 石けんと水を使った遊び

かかわりの対象 **人** **もの** 自然

これまでの姿

5月から絵の具や花紙を使っての色水遊びを楽しんでいた子どもたちは、水と色々なものを混ぜて遊ぶ楽しさを味わっていた。年少児が石けんを使って遊ぶ姿を見て、「やってみたい」という子どもの思いがあり、保育者も石けんを使った遊びを提案した。

子どもの姿

保育者の援助

- 登園すると、準備してある容器に水と石けんを入れる。
A「先生、どうやったら泡ができるの？」
B「手を洗うみたいにしたらいいよ」
保「Bちゃんみたいにすると泡ができそうだね」
- 自分の容器で石けんを泡立て始める。
C「先生、泡がたくさんになってきた」
D「ばくもいっぱいになったよ。見て見て」
- 保育室からE児がストローを持ってくる。
- E児が自分の石けん水の入った容器をストローで吹いて、泡を立てる。
F「Eちゃんすごい！どうやってやるの？」
E「ストローを入れて、ブクブクってするの」
A「先生、私もやってみたい」
- 保育室にストローを取りに行き、それぞれの容器をブクブクして遊ぶ。
E「先生、ヤマモモをとってきてもいい？」
保「いいよ」
- E児がヤマモモをとってきて、それを泡の入った容器に入れて潰し始める。
E「紫のジュースになっちゃった」
C「私もヤマモモ入れたい」
D「一緒に取りに行こう」
- とってきたヤマモモを入れて潰したり、入れたまま息を吹き込み、ブクブク(泡)をつくったりする。
- 自分がつくった石けん水をポリ袋に入れて、大切に持ち帰る。

【環境構成】机、容器、石けんなどを準備しておいた。

- B児の言った言葉を取り上げ、保育者も手を洗うようにして泡をつくった。

「Bちゃんみたいにすると泡ができそうだね」

- E児の気付きに共感しながら、立てた泡を触ったり、吹いたりしてその感触などを一緒に楽しんだ。

「触るとパチンと割れるね」

「ふーってするととんでいくね。そうね、シャボン玉みたいね」

- ヤマモモを入れたいという気持ちを受け入れ、子どもたちが真似して遊んだり、見立てて遊んだりする姿を見守るようにした。

「Eちゃんのは紫のジュースになったね」

- 泡をつくるだけでなく、ヤマモモジュースをつくって楽しむ姿も見守った。
- 持ち帰りたい、明日もやりたいのどっておきたいという気持ちを大切にするようにした。

考察

絵の具や花紙などを水に混ぜて遊んだり、切ったカラーポリ袋やペットボトルのふたなどを混ぜたりして、子どもたちは水に何かを混ぜて遊ぶことを存分に楽しんでた。石けんは、子どもたちにとって身近なもので、泡立つことを今までの生活経験から知っており、水にも容易に溶けるものである。保育者は、水とのかかわりが多くなる季節に石けんを使った遊びを取り入れ、泡立てる楽しさやその感触などを十分に楽しんでほしいと思っていた。子どもたちが泡の感触やおもしろさを感じながら熱心に泡立てて遊ぶ姿に共感しながら一緒に楽しむようにした。本事例では、初めて泡遊びを楽しむ子どもたちが、年少児の経験から遊びを広げていった友だちの姿を見ながら遊びを楽しむ姿が見られた。保育者として、子どもたちの経験や遊びの流れを大切にしながら、その時期に応じた遊びを提案していきたい。

本事例から見られた子どもたちの自分らしさの広がり

石けんを水に溶かして泡立てて遊ぶ姿



友だちのしていることを真似て、さらに遊びを楽しもうとする姿

対象児 年中児 (女A児, B児, C児, D児)

記録日 平成20年 1月上旬

場面 竹馬・鉄馬	かかわりの対象 <input checked="" type="radio"/> 人 <input checked="" type="radio"/> もの <input type="radio"/> 自然
<p>これまでの姿</p> <p>園庭にある様々な遊具で遊んでいる子どもたち。鉄棒で前回りや足を掛けてぶら下がる技に挑戦したり、のぼり棒を上まで登ろうとしたりして遊んでいる。子どもたちにいろいろな体験をしてほしいと考え、1月になり、園庭に竹馬や鉄馬を準備した。</p>	
子どもの姿	保育者の援助
<ul style="list-style-type: none"> ○ 園庭で年長児が竹馬に乗っているのに気付く。 A 「先生、私も竹馬に乗ってみたい」 B 「私も！」 保 「じゃあ、先生と一緒にやってみようか」 ○ 初めは竹馬に乗ってみるが難しくてなかなか乗れない。補助のついた鉄馬に乗ってみる。 C 「うわー、ぐらぐらする」 D 「先生ちょっと持ってて」 ○ 初めは立っているのがやっとだったが、一歩ずつ足を進められるようになる。 E 「先生見てて。2歩歩けるよ！」 B 「私も。先生、見てて！」 A 「次、貸して」 B 「いいよ」 ○ 保育者が補助のない鉄馬を準備すると、順番にそれに挑戦する。 C 「先生、ちょっとだけ手を離していいよ。あーもう一回やってみる」 ○ 片付けの時間になり、片付ける。 D 「明日もまたやろうね」 E 「お母さんにも教えてあげよう」 	<p>【環境構成】園庭に竹馬や鉄馬を準備して、自由に遊べるようにした。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 補助の付いた鉄馬を紹介し、一緒にやってみる。 「まずは、鉄馬からやってみようか」 ○ 周りの子どもたちとの距離を十分に確保し、安全に留意するように言葉掛けをした。 ○ 怖がっている子どもには、保育者が支えて少しずつ慣らすようにした。 ○ 少しずつできるようになった姿を共に喜び、さらに挑戦しようとするよう言葉掛けした。 「さっきは一歩だけだったのに！やったね」 「〇〇ちゃんの方まで行ってみようか」 ○ 子どもたちが、鉄馬を貸し借りしながら遊ぶ様子を認め、賞賛した。 「一緒に使って遊ぶと、楽しいね」 ○ 今日できるようになったことを共に喜ぶ様子、保護者にもがんばった姿を伝えた。
<p>考察</p> <p>園庭の遊具を使って様々な遊び方ができるようになってきた3学期。鉄馬は、子どもたちにとっては初めての遊具であったが、乗れるようになりたいという気持ちが強く、何度落ちてでも挑戦する姿が見られた。何度も落ちながら、鉄馬の上でどのようにバランスをとればよいか、足の向きはどうすれば歩きやすいかなど自分なりにコツを掴み、一歩ずつ足を進められるようになっていった。少しずつ乗れるようになってきた姿を保育者や友だちに認められたり、一緒に遊んでいる友だちが乗れるようになった姿を見たりすることで、さらにやる気も高まってきたようだ。</p> <p>本事例では、子どもたちが自分なりに試行錯誤する姿が見られた。保育者として、子どもたちの様々な遊具との出会いを計画し、ちょっと頑張ればできるようになること(心地よい負荷)を提供し、あきらめずに挑戦し続けようとする姿を育てられるような環境構成を大事にしていきたい。</p>	
<p>本事例から見られた子どもたちの自分らしさの広がり</p> <div style="display: flex; align-items: center; justify-content: center;"> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 10px; text-align: center; width: 30%;"> <p>園庭にある様々な遊具を使って自分のできる技に挑戦する姿</p> </div> <div style="font-size: 2em; margin: 0 20px;">➡</div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 10px; text-align: center; width: 30%; background-color: #e0e0e0;"> <p>鉄馬という新しい道具に出会い、何度も鉄馬から落ちながらも、あきらめずにやり続ける姿</p> </div> </div>	

場面 鍵盤ハーモニカ

かかわりの対象 **人** **もの** 自然

これまでの姿

おたのしみ会が近付き、どんな出し物をしたいかクラス全体で話し合ったところ、「演奏がしたい」という女の子たちがいた。これまで、タンブリンやカスタネット、トライアングル、すずを使って合奏ごっこを楽しんでいた経験から、「演奏がしたい」と考えたのだろう。そこで保育者は、さらに遊びが広がるといいなと思い、鍵盤ハーモニカを子どもたちが使える楽器の一つとして準備してみた。

子どもの姿

保育者の援助

- おたのしみ会の練習をする中で、鍵盤ハーモニカを知る。
A「先生、おたのしみ会の練習しよう」
保「そうそう、今日は(鍵盤ハーモニカを見せながら)こんな楽器を用意してみたんだけど・・・」
B「うわあ、これ何?」
C「これ、お兄ちゃんが持っているよ」
保「小学生になったら、音楽っていうお勉強で使う鍵盤ハーモニカっていう楽器なんだよ」
A, B, C「やってみたい!」
- 鍵盤ハーモニカを使う。
C「どうやって使うの?」
保「息をふーって入れて鍵盤を押してみて」
A「わあ、音が鳴った」
B「わたしも鳴ったよ」
D「何やってるの? (様子を見て) ぼくもやってみたい」
C「ふーって息を入れながら弾くんだよ」
- 鍵盤ハーモニカを使って演奏をする。
A「何か、演奏をしてみたいな」
B「きらきら星を弾こうよ」
C「どれがドレミか分からないなあ」
保「じゃ、印を付けようか?」
A「先生、音楽(楽譜)も書いて」

【環境構成】鍵盤ハーモニカを準備し、子どもたちの活動の広がりを期待した。

- きれいな手、口で楽器を扱うこと、ホースは使ったら洗って片付けることなどを確認した。
- 「やってみたい」という子どもたちの気持ちに共感し、一人1台ずつ、鍵盤ハーモニカを渡した。

- 鍵盤ハーモニカに初めて触れる面白さに共感しながら、使い方を少しずつ伝えていった。
- 音を鳴らして楽しむ様子を見付けて、途中からやってきたD児も鍵盤ハーモニカに触れることができるように言葉掛けをした。

「D君にも音が鳴って楽しいこと、教えてあげてね」

- 鍵盤ハーモニカに触れて音を出すことから演奏することへと発展させていく子どもたちの気持ちを受け止め、鍵盤にシールで印を付けたり、楽譜を用意したりした。

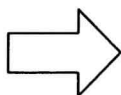
考 察

これまでの合奏ごっこを楽しむ姿を受け、活動の広がりを期待して用意した鍵盤ハーモニカ。初めて触れるものであったことから、一気に子どもたちの注目を引き、「やってみたい」という意欲が高まっていった。息を吹き込んで音が鳴ったという驚きと、鍵盤ハーモニカでメロディを奏でることができるという面白さを味わう子どもたちの様子が見られた。

今後、これまでの合奏ごっこに鍵盤ハーモニカを加えて遊びを広げていくのではないだろうか。保育者として、子どもたちの遊びがさらに広がり、充実感や満足感、友だちと一緒に楽しさを共有する心地よさなどを味わえるような「もの」を探っていきたい。

本事例から見られた子どもたちの自分らしさの広がり

鍵盤ハーモニカに触れて音を出す面白さを味わう姿



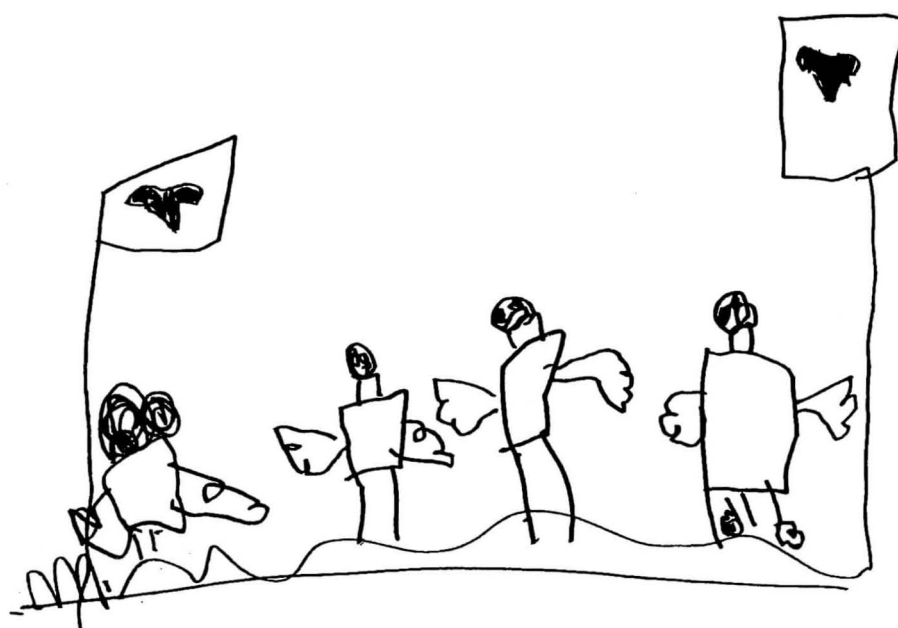
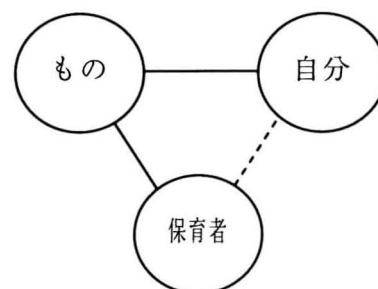
鍵盤ハーモニカの使い方を知り、演奏を楽しもうとする姿

② 「もの」を遊びに取り入れながら、その特性に気付いていく姿

絵の具遊びに興味をもち、絵の具で色を塗ったり絵を描いたりして楽しんでいると、ふと、筆を洗ったあとにできたきれいな色水に気付く。子どもたちは、絵の具の新たな特性に気付き、さらに遊びを広げていく。

子どものこのような姿に寄り添いながら、保育者としてどのように子どもたちや「もの」にかかわっていけばよいのか、援助の在り方を工夫していくことが求められるだろう。

ここでは、子どもが主体的に「もの」にかかわる中で様々な特性に気付いて遊びを楽しみ、「保育者」と「自分(子ども)」が少しずつ間接的なかわりになっていく中で自分らしさを発揮していく姿を紹介していく。



場面 鉄棒遊び	かかわりの対象	人	もの	自然
---------	---------	---	----	----

これまでの姿

子どもたちは、入園当初からブランコや雲梯など様々な固定遊具にかかわって遊んでおり、体を動かして遊ぶ楽しさを味わっている。9月頃から自分のしたい遊びを楽しむ中で、同じ場を共有している友だちの存在に気付き、「一緒に遊ぼう」と誘ったり、一緒に遊びたい友だちと同じようなことをして遊んだりすることを楽しむようになってきた。鉄棒を使った遊びでも、ぶら下がったり、前回りをしたりして楽しむ友だちの姿に刺激を受けて挑戦しようとする姿から、「自分もしてみたい」「自分もできるようになりたい」という気持ちも膨らんできているようだ。

子どもの姿

保育者の援助

[11月12日]

○ 鉄棒にぶら下がったり、前回りをしたりして遊ぶ。

A「先生、見て！」

保「Aちゃん、お猿さんみたいだね」

B「先生、見ててね」

保「あらっ、Bちゃん、前回りができるようになってる！」

B「うん。昨日おばあちゃんに教えてもらったの」

C「Cもできるよ！」

保「Cちゃんも鉄棒をぎゅってつかんで上手にできるねえ。よし！先生もお猿さんみたいにしてみようかな」



○ D児が前回りに挑戦しようとする。

D「ほくもしたい。どうするの？」

B「わたしが教えてあげる！見ててね」

D「ちょっとこわいなあ」

保「先生がぐるんと回そうか」

D「ううん。自分でしてみる」

保「そうか。じゃあ先生は見ているね」

○ D児は、友だちの前回りを見たり、お腹をかけてぶら下がったりして前回りの練習をする。

[11月13日]

○ この日も前回りに挑戦していたD児が前回りができるようになる。

D「先生、前回りのできたよ！できた！見に来て！」

E「Dくん、すごいよ！」

保「そう！Dくんやったあ！見せて、見せて」

○ 保育者や友だちの前で前回りをして見せる。

○ 「先生にみてほしい」という気持ちを受け止めるようにするとともに、子どもたちの遊びに加わりながら、体を動かして遊ぶ楽しさを共に味わうようにした。

「Aちゃん、お猿さんみたいだね」
「前回りができるようになってる」
「鉄棒をぎゅってつかんで上手にできるねえ。よし！先生もお猿さんみたいにしてみようかな」

○ 子どもたちのやりとりを見守りながら、「自分でしてみたい」という気持ちを受け止めるようにした。

○ じっくりと鉄棒にかかわる姿を見守りながら、必要に応じて言葉を掛けるようにした。

○ 前回りができるようになったことを共に喜んだ。



考察

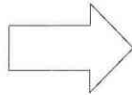
本事例は、友だちが鉄棒にかかわる姿が刺激となって「前回りをしてみたい」という気持ちから、じっくりと鉄棒にかかわり自分の思いを満足させていった事例である。

保育者は、子どもたちの遊びに加わりながら、鉄棒を使って体を動かす気持ちよさを共に味わうとともに、やり方を教えようとしたり、技を見せたりなど子どもたち同士がかかわる姿を認めるようにした。また、鉄棒にかかわる姿を見守り、必要に応じて言葉を掛けることで、D児もじっくりと鉄棒にかかわることができたのではないだろうか。

今後も、子どもたちがじっくりと様々なものにかかわる姿を大切にするとともに、友だちと一緒に遊ぶ楽しさや体を動かして遊ぶ心地よさが一層味わえるように援助を工夫していきたい。

本事例から見られた子どもたちの自分らしさの広がり

鉄棒を使って遊ぶ楽しさを味わう姿



友だちの遊びを刺激にして「自分もしてみよう」と挑戦する姿や友だちのがんばりを認めようとする姿

対象 年少児(女A児)

記録日 平成20年10月16日(木), 17日(金)

場面 うさぎのお面

かかわりの対象 **人** **もの** 自然

これまでの姿

子どもたちは、自分のしたい遊びを見付け、友だちとかかわりながら様々な遊びを楽しむようになってきている。その中で子どもたちは、時にはぶつかり合いながらも、保育者が子どもたちの気持ちを代弁したり、一緒に話し合ったりすることによって、友だちの気持ちに気付き、「貸して」「替わって」「ありがとう」などの言い方を知り、意思疎通の方法を習得してきている。しかし、中には、なかなか自分の主張をうまく表現できずにいる子どもも見られる。

子どもの姿

保育者の援助

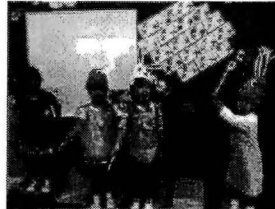
[10月16日]

- 運動会で使用したうさぎのお面をB児とC児が頭にお面を着けて、運動会ごっこをして遊んでいる。
A「うさぎ、うさぎ」
保「うさぎがどうかしたの？」
A「うさぎがいい」
保「そうか。Aちゃんはうさぎのお面が使いたいんだね。そういうときは『貸して』ってお友だちに言うといいんだよ」
A「(保育者を見ながら) 貸して」
保「先生を見て言うんじゃないで、Bちゃんのおめめを見て言ってごらん。」

- 運動会の余韻を味わうことができるように、運動会で使ったうさぎのお面や洋服、ねこバスなどを準備しておいた。
- 「使ってみたい」という気持ちを受け止めながら、A児の実態に即した言葉掛けをするように心掛けた。
「そういうときは、『貸して』ってお友だちに言うといいんだよ」

[10月17日]

- B児が運動会ごっこをして遊んでいる。
A「うさぎがいい」
保「うさぎのお面が使いたいんだね。そういうときはどういう風に言えばよかったかな？」
A「貸して」
B「いいよ、順番ね」
保「ありがとう、次は、B君の番だね」
B「どういたしまして」



- 前日の経験を生かして、違った言葉掛けを行った。
「そういうときは、どういう風に言えばよかったかな？昨日は何て言ったかな？」
- 貸してくれたB児に対しても、「いいよ、どうぞ」と言えたことを賞賛し、交代で使っていくことができるような言葉掛けをした。

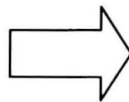
考察

この事例は、A児が二つしかないうさぎのお面を「使いたい」、「お面をつけて遊びたい」と主張したことによって、その気持ちをどう伝えていけばいいのを知り、それを相手に伝えようとした事例である。これまでA児は、自己主張をすることが少なく、「うさぎがいい」と自己主張できたことは大きな成長だったように感じる。

A児は、自分の気持ちをうまく言葉で表現できないこともあるが、今後、「他」とのかかわりを通じて言語を始めとする様々な生活経験を積んでいくと考えられる。その際、**子どもの実態に合わせた言葉掛けの工夫や必要に応じて見守ることが必要になるであろう。**そのためにも、**実態の把握のための日々の記録を大切にしていき、子どもたちの成長を見守っていきたい。**

本事例から見られたA児の自分らしさの広がり

伝え方が分からず、戸惑う姿



「貸して」という言葉を知り、それを相手に伝えようとする姿

対象 年中児

記録日 平成20年5月20日(火)

場面 色水づくり

かかわりの対象 人 もの 自然

これまでの姿

園での生活にだいぶ慣れた子どもたちは、新しい遊具や教材に興味や関心をもち、これからの園生活に期待している姿が見られる。絵の具は年中児になり初めて個人用として手にしたものの一つである。絵の具の使い方を確認しながら、クラス全員で「こいのぼりのうろこ」を絵の具で塗る活動をした。その後子どもたちは、絵の具を使って好きな絵を描いたり、筆を洗った水入れにできたにごりのない色水をつくったりしている。

子どもの姿

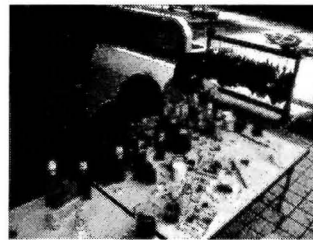
- 絵の具を準備する。
 - A 「先生、机を出してください」
 - B 「Aくん、一緒にしていい？」
 - C 「私はどこに座ったらいいの」
 - 保 「Cちゃん、ここあいてるよ」
- 色水をつくる。
 - B 「こんな色ができたよ」
 - D 「同じ青なのに色が違うよ」
 - 保 「そうだね。きれいだね」
 - C 「赤と白を混ぜたらピンクになっちゃった」
- 色水を入れたいろいろな色のポリ袋を机に並べる。
 - A 「ジュースやさんですよ」
 - D 「抹茶をつくらうと思ったけど、黒が多すぎた」

保育者の援助

- テラスに机を出し、水入れや筆ふきなど必要なものを準備し、数人で仲良く使えるように言葉を掛けた。

「Cちゃん、ここあいてるよ」
- 友だちと楽しい雰囲気の中で、ゆったりとできるように机の数等を考慮した。
- 発見したことや感動したこと、不思議に思ったことなど素直に出てきた子どもの言葉に共感し、一緒に楽しんだ。

「そうだね。きれいだね」
- 年少児や年長児が興味をもって見に来ることを喜ぶ子どもたちの姿を大切にして、楽しく遊ぶ様子を見守るようにした。



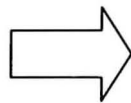
考察

本事例は、絵の具の使い方や特性（水に溶かして使う・色が混ざると違う色になる等）を全員で確認してから好きな遊びの中で絵の具を使って遊ぶ場面である。子どもたちは、水の加減によって絵の具が水っぽかったり固かったりすること、筆についての絵の具がいつの間にか他の色と混ざって様々な色ができることなどに気付き、絵の具の特性を楽しんでいる姿が見られた。また、2色以上を混ぜるとどんな色になるかを試したり、同じ青でもいろいろな色があることに気付いたりする姿も見られた。

保育者は、子どもたちが繰り返し遊ぶ中で感じた感動や驚きに共感しながら、遊びを存分に楽しむ姿を見守るようにした。今後も、子どもたちが繰り返し遊ぶ中で気付いたり、試行錯誤したりしていく姿を大切にしていきたい。

本事例から見られた子どもたちの自分らしさの広がり

絵の具の使い方を知り、もっと使ってみたくて興味・関心をもつ姿



繰り返し使う中で、絵の具の様々な特性に気付き、じっくりとかかわる姿


対象児 年中児

記録日 平成20年11月上旬

場面 楽器づくり	かかわりの対象 人 <u>もの</u> 自然
<p>これまでの姿 子どもたちは、身の回りにある空き箱やロールペーパー芯、ペットボトルなどを使っていろいろなものをつくって遊んでいる。10月に紹介した絵本の中に「変身トンネル」というページがあり、ティッシュの空き箱などが様々なものに変身する楽しいお話が載っていた。子どもたちはそれを見ながら自分でもつくってみようとする姿があった。</p>	
子どもの姿	保育者の援助
<ul style="list-style-type: none"> ○ ティッシュの空き箱に輪ゴムを掛けて音を鳴らして遊んでいる。 ○ 保育者の話を聞き、自分たちで楽器をつくってみようとする。 A「Aはじゃみせんみたいなのがいい」 B「私は、マラカスがいい」 C「ぼくは太鼓がいい」 ○ 自分たちで身近な材料の中から楽器に使えそうなものを選んでつくる。 保「マラカスは何でつくる？」 D「ペットボトルを二つつなげて、どんぐりを入れる」 保「どんぐりのほかに貝殻もあるよ」 E「私は、中に貝殻を入れる」 A「ギターは首からぶら下げようようにしたい」 保「じゃあ、紐で吊り下げようか」 ○ つくった楽器を使って、みんなで演奏してみる。 A「先生、箱が壊れちゃった」 F「ぼくのもやぶれちゃった」 保「ゴムを太いものに替えたから、ティッシュの箱では負けちゃったんだね。どうしようか？他に箱を探してみる？」 ○ 二人は、太いゴムを掛けても大丈夫な箱を選ぶ。 A「これにする。テープをはっていい？」 保「いいよ。今度の箱は壊れないね」 ○ それぞれが自分のつくった楽器を使った演奏を楽しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 11月に行われるおたのしみ会で使えるのではないかと考えて子どもたちがつくる様子を見守った。 ○ おたのしみ会で手作り楽器をつくってみないかと提案する。 ○ 子どもたちがつくれそうな楽器をいくつか提案し、どんな楽器をやってみたいか話し合うようにした。 ○ 子どもたちがイメージしているものを聞きながら、こんな素材もあるよと提案していくようにした。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; text-align: center;">「どんぐりのほかに貝殻もあるよ」</div> ○ 製作の過程では、難しいところは手伝いながら子どもたちが自分でつくる姿を見守るようにした。 ○ 実際に演奏したが、ギター之音が響かなかったため、太いゴムを準備した。 ○ 一つ目の楽器を大切に思う気持ちを大事にしなが、さらにいいものをつくれるように箱を探したり、一緒につくったりするようにした。 ○ 最後までつくり上げた姿を賞賛するようにした。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; text-align: center;">「いいよ。今度の箱は壊れないね」</div>
<p>考察 本事例は、子どもたちの遊びの中からおたのしみ会の出し物につなげていった事例である。保育者は、子どもたちが自分ではどんな楽器をつくってみたいか、その楽器をどんな材料でつくっていくかなどを一緒に考えながら、子どもたちがイメージするものに近付けるように「こんなものでもつくれるんじゃない？」と提案した。 大勢の人に音が聞こえるように太いゴムに替えたことで最初に用意していた箱では強度が足りずに壊れてしまったが、子どもたちは、試行錯誤しながら、どんな箱なら太いゴムを掛けても大丈夫か、箱の強度や大きさなどにもこだわって選ぶ姿がみられた。 今後も、身近な素材を使ってどんな遊び方ができるかを考えながら、子どもたちに新しい遊び方などを提案していきたい。</p>	
<p>本事例から見られた子どもたちの自分らしさの広がり</p> <div style="display: flex; align-items: center; justify-content: center;"> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 10px; margin-right: 20px;"> <p style="text-align: center;">身近な材料を使って自分の つくりたいものをつくる姿</p> </div> <div style="font-size: 2em; margin-right: 20px;">➡</div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 10px; background-color: #e0e0e0;"> <p style="text-align: center;">身近な材料で楽器をつくれる ことに気づき、試行錯誤して つくる姿</p> </div> </div>	

対象 年長児 (男A児, B児, C児)

記録日 平成20年 9月16日 (火)

場面 ペットボトルでの船づくり	かかわりの対象 人 もの 自然
<p>これまでの姿</p> <p>子どもたちは日頃から、空き箱やペットボトルなどを使って製作を楽しむ姿が多く見られる。一人でイメージしたものをじっくりとつくったり、友だち2～3人で一緒に話をしながらつくったりしている。そして、つくったものをごっこ遊びの中で積極的に取り入れて遊んでいる。</p> <p>自宅から空き箱やペットボトルを持ってきて、製作を楽しむA児は、船をつくりたい、ロボットをつくりたいというイメージを保育者によく伝えてくる。そんなA児が、持ってきた材料を保育者に見せながら「船と一緒につくろうね」と誘ってきた。</p>	
子どもの姿	保育者の援助
<ul style="list-style-type: none"> ○ 保育者と一緒に船をつくる約束をする。 A「先生、船と一緒につくろうね」 保「いいよ。じゃあ後でね」 ○ 保育室のテラスで、船をつくり始める。 B「何つくってるの？」 保「Aくんと一緒に船をつくってるんだよ」 B「仲間に入れて」 A「つくるのに夢中で、返事をしない」 保「Aくん、Bくんが仲間に入れてって言うんだよ」 A「いいよ！」 ○ A児, B児, 保育者で船をつくり続ける。 C「何してるの？」 A「船をつくっているんだ」 C「この前、僕も船をつくったんだ～」 ○ C児が自分のつくった船を見せる。 C「この船、こんな風に動くんだよ」 B「そうだ。この(A児の)船とくっつけたらカッコいいかもね」 C「いいね！」 A「そうだね！」 ○ 船をガムテープで組み合わせる。 A「後からみんなで池に行って、船を浮かべるんだ」 保「カッコいい船が出来上がったね」 	<ul style="list-style-type: none"> ○ A児の願いを受け入れ、朝の支度が終わったら一緒に作る約束をした。 ○ A児のイメージを聞きながら船づくりを手伝い、一緒に楽しくつくるようにした。 ○ 製作に夢中なA児に対して、仲間に入り込んでいるB児に気付くことができるようにB児の言葉を伝えた。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">「Aくん、Bくんが仲間に入れてって言うんだよ」</div> <ul style="list-style-type: none"> ○ 仲間に入りやすい雰囲気をつくったり、楽しくつくる様子を大切にしたりしながら、子ども同士のかかわりを見守った。 ○ 友だちと一緒に作る楽しさを味わう姿を見守り、3人でつくった喜びに共感するようにした。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">「カッコいい船が出来上がったね」</div> <div style="text-align: center; margin: 5px 0;">  </div>
<p>考察</p> <p>本事例は、ペットボトルの船を通して、一つのことを友だちと協力して作り上げていく場面である。友だちがつくっているものに興味をもち、一緒に作りながら互いの気持ちを話し合っていた。C児が自分の製作したものを提供し、組み合わせたものを完成させたことで、3人の気持ちが一つになり、完成した喜びを共有し、満足感や充実感も十分に味わうことができたと思う。保育者は一緒に手伝ったり、様子を見ながら見守ったりするようにして、子どもたちが作り上げたという満足感を味わうことができるように心掛けた。</p> <p>今回の3人は、日頃の遊びの中で接する機会が少なかったが、船と一緒に作ることで触れ合うことができ、友だちの新しい一面も見ることができたと思う。</p> <p>これからも、友だちとのつながりを広げ、遊びが充実し、協力する楽しさを感じることができるような言葉掛けや援助、環境構成の工夫を探っていきたい。</p>	
<p>本事例から見られた子どもたちの自分らしさの広がり</p> <div style="display: flex; align-items: center; justify-content: center;"> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 10px; margin-right: 20px;"> <p>つくりたいものをつくり上げようとする姿</p> </div> <div style="font-size: 2em; margin-right: 20px;">➔</div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 10px; background-color: #e0e0e0; margin-left: 20px;"> <p>協力して作り上げた満足感や充実感を味わう姿</p> </div> </div>	

対象児 年長児（女A児）

記録日 平成20年11月10日（月）

場面 跳び箱	かかわりの対象 人 もの 自然
<p>これまでの姿</p> <p>日頃から体を動かすことが大好きなA児。おたのしみ会では、体操のグループに入るようになった。グループのメンバーで話し合い、おたのしみ会では、跳び箱、側方倒立回転（以下側転）、フラフープ、組体操を披露することになった。側転が得意なA児は、「自分は側転だけする・・・」と、数回練習して跳べなかった跳び箱をやりたくないという気持ちを保育者に伝えてきた。「怖い」「うまく跳べない」という気持ちで跳び箱に挑戦しようという意欲がもてずにいるようである。</p>	
子どもの姿	保育者の援助
<p>○ 登園するとすぐに、水遊び場に跳び箱が設置してあることに気付く。 A「跳び箱がある。先生、跳んでいいの？」 保「どうぞ。ここにあったら楽しいかなと思って」 A「でも、今日も跳べないかも・・・」 保「今日は跳べるかもよ！一緒にやろうね」</p> <p>○ 朝の支度が終わった友だちと一緒に跳び箱を跳び始める。 A「やっぱり怖いな・・・」 B「大丈夫だよ。こうするんだよ」 A（跳ぼうと試みるが跳び箱の前で止まって）「やっぱり怖い」</p> <p>○ 友だちや保育者と一緒に跳び箱に挑戦する。 保「Bちゃんの跳び方を見てみたら」 B「Aちゃん、大丈夫。怖くないよ」 A「う～ん。怖くないかな・・・」</p> <p>○ 跳び箱に乗ることができるようになる。 A「跳び箱に乗っちゃった～」 B「Aちゃん、やったね」 保「やった！ねっ、怖くないでしょ。跳び箱に乗れたから、あと少して跳べるかもね」</p>	<p>○ 前週まで、跳び箱への恐怖心をもっていたA児やクラスの子どもたちが、気軽にいつでも跳び箱に挑戦できるように保育室から近い場所（水遊び場）に跳び箱、マット、踏み板を設置しておいた。</p> <p>○ 友だちと一緒に跳び箱に挑戦する姿を見守り、様子を見ながら言葉掛けを行った。 「怖いていう気持ちを吹き飛ばしちゃえ！」</p> <p>「Bちゃんとかうやって練習してたら、今日跳べちゃうかもね」</p> <p>○ A児の恐怖心を和らげることが大切だと考え、B児の楽しそうな様子を一緒に見たり、跳び箱を跳ぶ際のコツ（手を跳び箱の前方に乗せるなど）を伝えたりした。</p> <p>○ 跳び箱の前で止まっていたA児が跳び箱の上に乗れたことを認め、少しずつ前進していることを一緒に喜んだ。 「やった！ねっ、怖くないでしょ。跳び箱に乗れたから、あと少して跳べるかもね」</p>
<p>考察</p> <p>「跳び箱を跳べるようになりたい」という気持ちをもちながらも、「怖い」「できない」と葛藤していたA児。跳び箱を保育室の近くに設置し、友だちといつでも気軽に触れることができるようになったことが、挑戦してみようとA児の気持ちを奮い立たせたようである。</p> <p>これまで跳び箱に挑戦しながらも、なかなか跳ぶことができず、怖いという気持ちがどんどん大きくなっていったA児だったが、一緒に励ましてくれる友だちのおかげで、「自分もできるようになるのかな」という前向きな気持ちへ変化していった。跳び箱の上に乗れるようになったA児は、この日のうちについて跳び箱を跳ぶことができ、繰り返し跳び箱を跳ぶことを楽しんでいった。</p> <p>保育者として、子どもの葛藤する気持ちを受け止め、どのようにかかわっていくかを一人一人に応じて工夫していくことが大切だろう。その際、友だちの存在が子どもたちにとって大きな励みとなることを意識しながら言葉掛けをしていくことが効果的であると考え。子どもの挑戦する意欲を大切に、子どもたちが様々なものとのかかわりを通して自信をつけていけるように、一緒に活動に取り組んでいきたい。</p>	
<p>本事例から見られたA児の自分らしさの広がり</p> <div style="display: flex; align-items: center; justify-content: center;"> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 10px; margin-right: 20px;">跳び箱が跳べなくて葛藤する姿</div> <div style="font-size: 2em; margin-right: 20px;">➡</div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 10px; background-color: #e0e0e0; margin-left: 20px;">跳び箱への恐怖心が和らぎ、跳べるようになったことで自信を獲得する姿</div> </div>	

場面 保健室の聴診器を使って	かかわりの対象 人 もの 自然
<p>これまでの姿</p> <p>保健室にケガや疾病で来ることが多いが、保健室に置いてある道具などに目を向けることが少なかった子どもたち。園生活にも慣れ、次第に保健室の雰囲気や道具に関心をもつ姿が見られるようになってきた。「これは何?」「あれはどんなときに使うの?」と手に取って見たい、知りたいと好奇心旺盛な様子がかがえた。</p> <p>病院などで見慣れている聴診器を保健室で見つけたA児は、「お医者さんはいつも（聴診器を使って）何をしているのだろう?」と疑問をもち、聴診器を使ってみたいという思いを保育者に伝えてきた。</p>	
子どもの姿	保育者の援助
<p>○ 聴診器を使い、保育者と一緒にからだについて考える。</p> <p>保（A児の胸に聴診器を当てて） 「お医者さんは胸のところを聴診器でもしもしするよね」 A「する。何か聞こえる?」 保「Aちゃんの心臓が元気に動いている音が聞こえるよ」 B「心臓ってそこにあるの?私はどうかな?」 A（B児の胸に聴診器を当てて） 「ドクドクッと音がするよ。Bちゃん元気なんだね」 保「お医者さんは、もしもしして心臓の音を聞いてみんなが元気かどうか調べているんだね」</p> <p>○ 自分たちの周りの生き物について考える。</p> <p>保「飼育小屋のウサギさんやニワトリさんの心臓もドキドキしているんだよ」 B「聞いてみたいな。今度聞きに行こう」</p>	<p>○ A児の気持ちを受け止め、実際に聴診器に触れさせた。</p> <p>○ 聴診器の仕組みを知り、聴診器から聞こえる音が心臓の音であることを実感しながら、自分の体のことに興味をもつことができるように言葉掛けした。</p> <p>「Aちゃんの心臓が元気に動いている音が聞こえるよ」</p> <p>「お医者さんは、もしもしして心臓の音を聞いてみんなが元気かどうか調べているんだね」</p> <p>○ 聴診器から聞こえる心音の不思議さを互いに実感している姿を見守った。</p> <p>○ 人だけでなく動物にも心臓があり、動いていることに気付くことができるような言葉掛けをした。</p> <p>「飼育小屋のウサギさんやニワトリさんの心臓もドキドキしているんだよ」</p>
<p>考 察</p> <p>本事例は、これまで病院等で見ることはあった聴診器の役割を知り、聴診器で心音を聞くことで心臓が動いている様子を感じ取ることができた事例である。子どもたちは心臓の音に驚き、生きていることを実感することができなのではないだろうか。</p> <p>子どもたちが聴診器をきっかけにして、心臓の音を聞き、自分の体の仕組みに関心をもつ姿を大切にするようにした。また、自分だけでなく、友だちや動物たちも生きているということを感じることができるような言葉掛けにも心掛けた。</p> <p>保育者として、自分の体に関心をもつ子どもの姿を大切にしながら、生きているということ、命の大切さについてなどを、様々な機会と一緒に感じていきたい。</p>	
<p>本事例から見られた子どもたちの自分らしさの広がり</p> <div style="display: flex; align-items: center; justify-content: center;"> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 10px; margin-right: 20px;"> <p>聴診器について知りた と思う姿</p> </div> <div style="font-size: 2em; margin-right: 20px;">➔</div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 10px; background-color: #e0e0e0; margin-left: 20px;"> <p>自分も友だちもみんなドキ ドキしている（生きている んだ）と感じる姿</p> </div> </div>	

場面 カットバンは必要なのか

かかわりの対象 **人** **もの** 自然

これまでの姿

2学期に入り、幼稚園生活にも慣れてきて子どもたちの行動範囲は以前より広くなり、園庭やプレイルームで駆け回る姿がある。それと同時に、ケガも多くなり、保健室に来る頻度も高くなってきた。子どもたちは「先生、ケガしたからカットバン貼って」と保健室に入ってくる。ケガの度合いは様々だが、ちょっとしたケガをした場合でも、カットバンを貼ってほしいと訴えてくる実態がある。カットバンを貼らないと保健室を離れない子どもも少なくない。子どもたちは、ケガをしたらカットバンを貼ることで、ケガがよくなると思っているようだ。

子どもの姿

保育者の援助

- ケガをしたA児と付き添いのB児が保健室にやってくる。
A「先生、ぶつかってケガをして皮がむけたんだ」
B「先生、カットバン貼らなきゃ、カットバン！」
保「あら、少し皮がむけているだけだからカットバンは要らないよ」
A「えっ！それじゃあケガは治らないよ。貼った方がいいよ、貼って」
- 保育者がカットバンを開けるのを、じっと見つめる。
保「カットバンを貼ったらケガが治るのかな？本当だったらすごいね。魔法のテープみたいだ」
B「うーん、セロテープを貼ったらどうなるかな」
A「わかった、カットバンには白いところがあるから、そこで血を止めるのかな」
保「そうだね、血が出ているときは、血を止めるために貼るけど、皮がむけたり、転んだりした時のケガには貼らない方が治りが早いよ。ケガしたところをきれいに洗って、外の空気をいっぱい吸わせてあげると、すぐに治っちゃうよ」
B「そうなの？すごいっ！」
A(ケガしたところを水で洗い、砂をきれいに落とす。)
- C児が逆剥けの痛みを訴えに保健室にやってくる。
C「先生、カットバン！ケガしたの」
B「カットバンは貼らなくても大丈夫だね、血が出てないからね」
保「うみ組のお兄さんも大丈夫だって」

- A児のケガについていくつか尋ね、ケガした箇所をよく観察した。
- カットバンを貼らなくてもよい場合があることを二人が気付くことができるように言葉掛けした。

「そうだね、血が出ているときは、血を止めるために貼るけど、皮がむけたり、転んだりした時のケガには貼らない方が治りが早いよ。ケガしたところをきれいに洗って、外の空気をいっぱい吸わせてあげると、すぐに治っちゃうよ」

- 年中児のC児に年長児のB児とA児がカットバンについての話をする姿を見守った。

考察

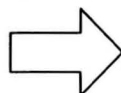
日頃から「ケガをした時、カットバンを貼ればよくなる」という認識が子どもたちにあることが気になっていた。本事例は、ケガをした時、カットバンを貼ればよくなるというのではなく、処置の一手段であることを子どもたちに伝えるよい機会となった。ケガをしたときは、自分で砂を落とし、自然とよくなる力があることを知ってもらう前段階となったのではないかと考える。

保育者として、今子どもたちがもっている知識を受け止めながら、カットバンがいないケガもあるということを知らせ、自分の体の不思議について感じるができるといいなと思ひ会話するように心掛けた。保育者との会話の中で自分が知ったことを他の園児に伝える場面も見られたことから、子どもたちなりにカットバンの必要性について感じ取ることができたのではないだろうか。

今後も、保健指導を通して、子どもたちが自分の健康に関心をもち、体の仕組みなどを知りたいという意欲を高めていきたいと考える。

本事例から見られた子どもたちの自分らしさの広がり

カットバンを貼ってケガを治そうとする姿



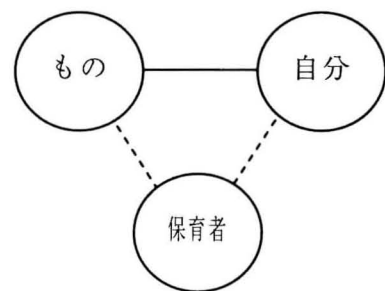
カットバンの必要性を知り、自然によくなる力に驚き、期待感を抱く姿

③ これまでの経験をもとに、「もの」の特性を生かして工夫して遊ぶ姿

主体的に「もの」とかかわるうちに、子どもたちは様々な「もの」の特性に気づき、その特性を生かして、遊びをさらに楽しむようになる。

年長児になると、これまでの経験が土台となり、様々な遊びでダイナミックに、工夫しながら「もの」とかかわる姿が見られる。大型積み木の遊びでは、これまで自分のイメージで積み木を積み上げて遊んでいた子どもたちも、次第に一緒に遊ぶ仲間とイメージを共有するようになり、大型積み木を使って友だちと遊ぶ楽しさを存分に味わうようになる。そこでの保育者の援助として、友だちと一緒に遊ぶ姿への「見守り」やつくり上げた喜びへの「共感」ということがあるだろう。

ここでは、これまでの経験をもとに、子どもが自ら「もの」を選び、工夫して遊びを進める中で自分らしさを発揮していく姿を紹介していく。



<p>場面 ジュースつくり2</p>	<p>かかわりの対象 人 もの 自然</p>
<p>これまでの姿 自分のしたい遊びを進める中で、友だちの存在に気が付き、一緒に過ごす楽しさを味わうようになってきた。「つくって遊ぶ」遊びでも、空き箱やロールペーパー芯、ストロー、ガムテープなどの中から、自分が必要なものを見付け、ポシットやカメラなどをつくって遊ぶ姿も見られる。また、友だちのつくったものに魅力を感じ、「自分も同じものをつくってみたい」「あれがほしい」と言う姿も見られるようになってきた。</p>	
<p style="text-align: center;">子どもの姿</p> <p>○ 引き出しから花紙を取り出し、ジュースつくりを始めようとする。 A「うわあ、青もある！」 B「ええっ！青もあるの？ジュースつくろう！」 C「ほくも！」</p> <p>○ いろいろな色のジュースつくりを楽しむ。 B「先生、見て。青いジュースができた！」 保「うわあ、きれいだねえ」 A「先生、こんな色になったよ！紫色！」 保「このジュース、どうやってつくったの？」 A「青とね、赤とね、白をね入れたの」 保「青と赤と白を入れたら、紫色のジュースができたんだ！Aちゃんがつくったジュース、おいしそうだねえ」</p> <p>○ 友だちのジュースの美しさに気付く。 C「Cもできたよ」 保「Cくんがつくったジュースも紫色だね」 C「でもね、Cは、Aちゃんみたいなのをつくりたいのにね、できないの」 保「あらっ、Aくんはどうやってつくったの？」 C「Cも青と赤と白を入れたよ」 保「そうか…。じゃあ、Aちゃんにどうやってつくったか聞いてみようか」 C「うん。でも…なんて言えばいいの？」 保「そういうときはね、『どうやってつくったの？』って尋ねたらいいんだよ」</p> <p>○ C児がA児につくり方を尋ねる。 C「どうやってつくったの？」 A「赤と白と青を入れたの」 C「ほくもAちゃんみたいな色にしたいの」</p> <p>○ 再度、ジュースをつくる。 C「もう1回つくってみよう。赤と青と白…。あっ、できた！」</p>	<p style="text-align: center;">保育者の援助</p> <p>○ 環境構成として、花紙の中に新しい色(青)を準備しておいた。</p> <p>○ 子どもたちが花紙を選んでジュースつくりをする姿を見守り、一人一人の喜びに共感するような言葉掛けをした。</p> <div data-bbox="941 817 1444 963" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>「うわあ、きれいだねえ」「どうやってつくったの？」「青と赤と白を入れたら、紫色のジュースができたんだ！おいしそうだねえ」</p> </div> <p>○ 「Aちゃんみたいなのをつくりたい」という気持ちを受け止め、尋ね方を伝えた。</p> <div data-bbox="941 1075 1444 1164" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>「『どうやってつくったらいいの？』って尋ねたらいいんだよ」</p> </div> <div data-bbox="941 1164 1181 1344" style="text-align: center;">  </div> <p>○ C児が自分でA児につくり方を尋ねたり、自分で再度ジュースをつくらうとする姿を見守るようにした。</p>
<p>考察 本事例は、子どもたちが新しい色の花紙に出合い、その花紙とこれまで使ってきた色の花紙とを組み合わせる中で、色の変化や美しさに気付いたり、友だちのつくったジュースのよさに気付いて、自分なりに同じ色のジュースをつくらうと試行錯誤したりしていった事例である。 保育者は、子どもたちがジュースをつくる様子を見守りながら、一人一人の気付きを共に喜び、受け止めるようにした。また、必要に応じて言葉掛けをしていくように努めた。子どもたちはじっくりとジュースつくりを楽しむと同時に、友だちのつくったジュースのよさにも気付き、「自分もあんなジュースをつくらう」という思いを膨らませていたのではないだろうか。 今後も「もの」とかかわる姿を見守ったり、必要に応じて言葉を掛けたりして援助を工夫し、一人一人がじっくりと遊ぶ中で、様々なことに気付いていけるようにしたい。</p>	
<p>本事例から見られた子どもたちの自分らしさの広がり</p> <div style="display: flex; align-items: center; justify-content: center;"> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 10px; margin-right: 20px;"> <p>ジュースつくりを楽しもうとする姿</p> </div> <div style="font-size: 2em; margin-right: 20px;">→</div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 10px; background-color: #e0e0e0;"> <p>新たな色の変化を楽しむ姿や友だちのようなジュースをつくるために、自分なりに工夫する姿</p> </div> </div>	

伝え合い

自分を出す

人とかかわる楽しさ

想像力

満足感

対象児 年中児

記録日 平成20年10月15日(水)

場面 砂場遊び	かかわりの対象 (人) (もの) 自然
<p>これまでの姿</p> <p>1 学期から砂場で遊ぶ姿は見られていたが、個人で砂遊びを楽しんでいたり、保育者と一緒に楽しんだりしていた。友だちと遊んでいても、少人数であったり、一緒に遊びながらもそれぞれで楽しみ、一人で穴を掘っていたり、ごちそうをつくったりしている姿が多く見られた。</p>	
子どもの姿	保育者の援助
<p>○ 男の子数人が砂場に出て穴を掘り始める。</p> <p>A「ぼくがここを掘っているんだから、Bくんはここを掘らないでよ」</p> <p>B「ぼくはここを掘りたいんだよ」</p> <p>保「Aくん、Bくんもここを掘りたいんだって。どうする？」</p> <p>A「だって、ぼくがここを掘っているんだからあっちを掘って欲しい」</p> <p>B「じゃあ、いいよ。ぼくは向こうを掘るよ」</p> <p>○ 自分たちで話をしてそれぞれに穴を掘る場所を決めて穴を掘り始める。</p> <p>○ 掘った穴に水をためたり、トンネルを並べたりし始める。</p> <p>C「水を汲んでくるね」</p> <p>D「こっちから流してくれる？」</p> <p>A「もっとどんどん水を汲んでこよう」</p> <p>E「トンネルも並べよう。全部並べようよ」</p> <p>保「すごいね。みんなで穴を掘ったり水を入れたりしたの？トンネルもこんなに並べたんだ」</p> <p>A「こっちの穴はね、AとCくん掘ったんだよ」</p> <p>C「先生、明日も続きをしたいからこのまま残しておいていい？」</p> <p>保「いいよ。このまま残しておいてまた明日続きをやるうね」</p>	<p>○ 前日、一人の男児が穴掘りを楽しんでいたのが明日も一緒にしようと話をし、登園した男児に言葉を掛けた。</p> <p>○ それぞれに自分の気持ちを言い合う姿を見守りながら、どうするかを一緒に考えるようにした。</p> <p>「Aくん、Bくんもここを掘りたいんだって。どうする？」</p> <p>○ 自分たちで話して解決する姿を見守った。その後も、自分たちで遊びを進めていく様子をほかの子と遊びながら見守った。</p> <p>○ 自分たちで遊びを進めた姿を賞賛するようにした。</p> <p>「すごいね。みんなで穴を掘ったり、水を入れたりしたの。トンネルもこんなに並べたんだ」</p> <p>○ 明日も続きをしたいという気持ちを受け止めるようにした。</p> <p>「いいよ。このまま残しておいてまた明日続きをやるうね」</p>
<p>考察</p> <p>これまでも友だちや先生と一緒に砂場での遊びを楽しむ姿が見られていたが、みんなで「こんな風にしたい」という目的をもって話をしながら遊びを進めるということは少なかった。本事例では、初めはそれぞれで遊んでいる姿が見られたが、穴に水を入れたり、友だちの山とトンネルでつながりしているうちに、みんなで一つの穴を掘ったり、話をして水を汲んでくる係を決めたりして遊びを進めるようになった。</p> <p>年中児は、様々な遊びを何度も繰り返す中で、自分のやりたいことを存分に楽しむ姿から友だちと一緒に目的をもって遊びを進めようとする姿へと変化が見られる時期である。今後も、子どもたち同士のかかわりの中で友だちと一緒に遊ぶことの楽しさを存分に味わえるような環境構成や、道具を貸し借りしながら遊びを進められるような環境構成を工夫していきたい。</p>	
<p>本事例から見られた子どもたちの自分らしさの広がり</p> <div style="display: flex; align-items: center; justify-content: center;"> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 10px; margin-right: 20px;"> <p>それぞれに自分の好きな砂遊びを楽しむ姿</p> </div> <div style="font-size: 2em; margin-right: 20px;">➡</div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 10px; background-color: #e0e0e0; margin-left: 20px;"> <p>友だちと一緒に目的をもって遊びを進めようとする姿</p> </div> </div>	

想像力

創造力

試行錯誤

満足感

充実感

自信

対象 年長児（男A児）

記録日 平成20年 5月上旬

場面 大型積み木でのロボットづくり

かかわりの対象 人 もの 自然

これまでの姿

大型積み木は、子どもたちにとって自分がイメージしたものをつくりやすく、立体的につくる楽しさを味わえる遊具である。

A児は、年中組の頃から基地やロケットなどいろいろなものに見立てて遊ぶことが多く、年長組になって、さらに大きなものをつくらうとする姿が見られている。そんなA児が、5月に入った頃、大型積み木を使ってつくったものを保育者に見てほしいと伝えてきた。

子どもの姿

保育者の援助

〔5月1日〕

- 保育者を呼びにくる。
- A「先生、見に来て。(大型積み木でつくったものを見せて) 見て、ロボットをつくったんだ」
- 保「かっこいいロボットだね」
- A「ここが手で、ここが顔なんだ」
- B「ここ（顔）に目をつけてもいいんじゃない？」
- A「(少し考えて) これでいいんだよ」



- A児が笑顔で呼びに来てくれたので、つくったものを見せてもらうことを楽しみにしながらプレイルームに行った。
- A児が一生懸命つくったロボットに共感し、言葉を掛けることで、さらに意欲を高めるようにした。

「かっこいいロボットだね」

- A児とB児の言葉のやりとりを見守り、A児の思いを会話を聞きながら受け止めるようにした。

ロボットを二つ、つくったんだよ！

〔5月7日〕

- 保育者を呼びにくる。
- A「この前より、もっと大きいロボットをつくったんだよ。先生、見に来て」

- A児のロボットづくりに対して続けている思いを受け止めるようにした。

考察

本事例は、A児が自分のイメージしたものを大型積み木でつくり上げた喜びを味わい、時間がたってもその思いが続いていた場面である。

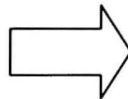
両手で持ち上げるくらいのある大きさがある大型積み木は、つくり方によって自分の体より大きいものをつくったり、大掛かりなものをつくったりすることができる。子ども自身が数種類の積み木をどう組み合わせるのかを考えたり、空間と時間を考えたりしながらつくることができる素材である。

今回、A児は自分の考えたロボットをつくり、保育者や友だちが認めてくれたことで、満足感や自信を味わうことができたと感じる。この体験が心地よいものであったことから、時間がたっても、さらに大きなロボットをつくらうという思いが持続し、積極的に取り組んだのではないだろうか。

これからも、つくった喜びやつくり上げるまでの思いを一緒に味わったり、イメージが広がるような言葉掛けなどを工夫したりしていきたい。

本事例から見られたA児の自分らしさの広がり

イメージしたものができて満足感や充実感を味わう姿



思いを持続して積極的にイメージを膨らませていく姿

対象児 年長児 (男B児, 女A児, C児, D児, E児, F児, G児) 記録日 平成20年5月下旬~中旬

場面 ジュース屋さんごっこ かかわりの対象 **人** **もの** 自然

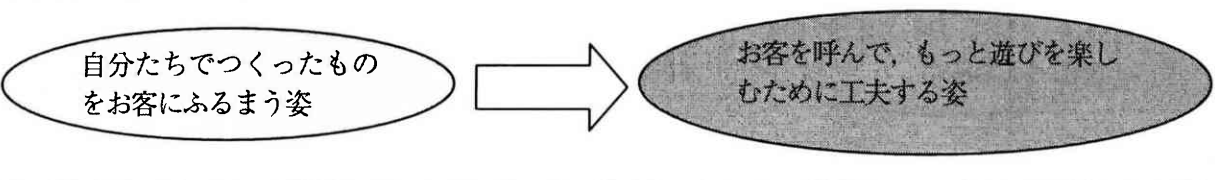
これまでの姿
 花紙や絵の具をペットボトルの中で水に溶かして、様々な色水づくりを楽しむ姿は進級当初から見られた。2色以上の色を混ぜ合わせたときに違った色ができると、「こんな色ができたよ!」「赤と青を混ぜたら紫になるんだね」とうれしそうに友だちや保育者に伝えていた。
 6月に入り、自分のつくった色水を友だちや保育者にあげたいという姿が見られ、ジュース屋さんごっこがスタートした。

子どもの姿	保育者の援助
<p>[ジュース屋さんの始まり]</p> <p>○ 保育者につくった色水 (以下ジュース) をふるまう。 A 「先生, ジュースを飲みに来て」 保 「ありがとう, どんなジュースがあるのかな?」 B 「(ジュースを指しながら) のオレンジ, イチゴ, メロン・・・」 保 「おいしそうだね。じゃあ, オレンジお願いします」 C 「はい, ちょっとお待ちください。どうぞ」 保 「おいしいね。もっとたくさんの友だちにも飲ませてあげたいな」 D 「私, ほし組さんたちを呼んでくる!」</p> <p>○ たくさんのお客さんがやって来る。 E 「忙しくなっちゃった」 [ジュース屋さんを続けるうちに見られた工夫]</p> <p>○ チケットを渡し, お客さんを呼ぶ。 F 「このチケットがあれば, ただでジュースが飲めますよ」 G 「私もほしいな」 F 「いいよ。はい」</p> <p>○ メニュー, 看板をつくる。 A 「メニューを書きたいな」 B 「看板をつくりたいな」 保 「この紙なんかどうかな?」</p>	<p>○ つくった色水 (以下ジュース) をごちそうしたい気持ちを受け止め, お客になりきって一緒にお店屋さんごっこを楽しむようにした。</p> <p>○ 子どもたちがもっているイメージを言葉として表すことができるように, さらに, 遊びに加わる仲間が増えるといいなと考え, 言葉掛けをした。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 「どんなジュースがあるのかな?」 「もっとたくさんの友だちにも飲ませてあげたいな」 </div> <p>○ ジュース屋さんへの呼び掛けをきっかけに, たくさんのお客がやってきて遊びが盛り上がっていったことを見守りながら, やりとりがうまくできるように様子を見ながら援助した。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 「○○ちゃん, 今うみ組のお姉ちゃんがつくっているから待っててね」 </div> <p>○ 子どもたちが工夫する姿や子ども同士がやりとりを楽しむ姿を見守り, お客になって加わりながらほかにどのようなものが必要かを考え, 言葉掛けをした。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 「この紙なんかどうかな?」 「お客さんを呼ぶために何かあるといいね」 </div>



考察
 これまで, 自分でつくることが楽しい, つくって満足という姿を見せていた子どもたちが, つくったものを使って遊びを楽しみたいという姿へと変化していく様子が見られた事例である。
 身近なもの (ペットボトル, 花紙, 絵の具, コップ, ストロー等) を使って, つくる楽しさを十分に味わった子どもたちだからこそ, もっと楽しみたいと感じ, 遊びを発展させていったのだろう。遊びがメンバーを変えながらも, 半月続いた様子から, 「ジュース屋さんごっこ」が子どもたちにとって魅力的な遊びだったことがうかがえる。
 保育者は, 子どもたちが強く興味や関心をもつ姿を見取り, 遊びを広げようとする姿に寄り添い, 周りへと遊びを広げていく役割が求められると感じる。本事例では, 十分にジュースをつくることができるように素材を準備し, 遊びに加わりながら保育者も役になりきって会話をし, 遊びの中心になるメンバーとそこへやって来たお客とをつなぐ言葉掛けに心掛けた。

本事例から見られた子どもたちの自分らしさの広がり



想像力

創造力

伝え合い

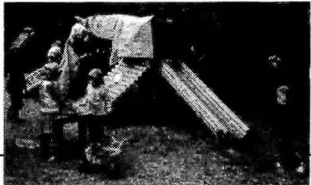
達成感

満足感

充実感

対象 年長児（女A児，B児，C児，D児，E児）

記録日 平成20年11月10日（月）

場面 アスレチックを使って	かかわりの対象 人 もの 自然
<p>これまでの姿</p> <p>子どもたちは、自分の好きなものになったり、憧れのヒーローやヒロインになったりなど、様々なものをイメージしながらごっこ遊びを楽しんでいる。</p> <p>おたのしみ会が近付き、絵本「わんぱくだんのにんじゃごっこ」から得たイメージをもつての劇遊びが盛んになってきたこの時期、年長児の女の子たちが、園庭のアスレチックのつり橋にビニールシートをかぶせ、トンネルをつくってごっこ遊びを楽しんでいた。</p>	
<p style="text-align: center;">子どもの姿</p> <p>○ 保育者を呼びにくる。 A 「先生，ちょっと来て！」 保 「どうしたの？」 B 「いいことがあるから，来てみて」</p> <p>○ アスレチックのつり橋に到着する。 A 「中を通してみて」 B （橋を揺らす） C 「ガオーッ」 D 「ウォー」 E （保育者の足を触る） 保 「きゃー！」（橋を渡り終わる） C 「どうだった？」 保 「ドキドキしちゃった。本当のジャングルみたいだったよ」 D 「ドキドキしたでしょう」 保 「まるで，絵本の『わんぱくだんのはらっぱジャングル』みたい。これは，『うみ組わんぱくだん』だね」 A 「先生，今度は，わたしたちのお話をつくりたいね」</p> <p>○ ほかの友だちや保育者を誘う。 A 「〇〇先生，ちょっと来てー！」</p>	<p style="text-align: center;">保育者の援助</p> <p>○ 子どもたちの保育者に来てほしいという気持ちを受け止め，何が起こるのかを期待しながら子どもたちについて行った。</p> <p>○ 自分たちで遊びを進めている姿を認め，保育者も仲間になって一緒に楽しんだ。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">「ドキドキしちゃった。本当のジャングルみたいだったよ」</div> <p>○ 子どもたちが見立てて遊ぶ姿や発する言葉から遊びのイメージを共有し，遊びを十分に楽しめるようにした。</p> <p>○ 好きな絵本のことを伝えることで，子どもたちがはっきりとしたイメージをもてるようにした。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">「まるで，絵本の『わんぱくだんのはらっぱジャングル』みたい。これは，『うみ組わんぱくだん』だね」</div> <div style="text-align: right; margin-top: 10px;">  </div>
<p>考察</p> <p>日頃から子どもたちは，イメージしたものを具体化させ，遊びを楽しんでいる。本事例もアスレチックの橋にシートをかぶせてトンネルに見立て，動物の鳴き声を真似して雰囲気盛り上げながら，イメージを具体化させた遊びである。</p> <p>自分たちのイメージが具体的に出来上がった喜びや達成感から，保育者に伝えたいという思いが溢れ出し，保育者と一緒に楽しんだことで，満足感や充実感を味わうことができたと思う。また，子どもたちのイメージがさらに広がってほしいと考え，子どもたちの好きな絵本を話題にするようにした。その後も，ほかの友だちや保育者を呼んで一緒に楽しんでいる様子から，子どもたちの遊びが持続し，広がっていったと感じた。</p> <p>これからも，子どもたちの遊びの中に芽生えたイメージや思いを見守ったり，共感したり，仲間になって遊びに参加したりしながら，様々な表現を楽しむ姿に寄り添っていきたい。</p>	
<p>本事例から見られた年長児の自分らしさの広がり</p> <div style="display: flex; align-items: center; justify-content: center; gap: 20px;"> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 10px; text-align: center;"> 友だちと一緒に遊びをつくる姿 </div> <div style="font-size: 2em;">➡</div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 10px; text-align: center;"> 友だちとイメージを膨らませ，遊びの世界を広げる姿 </div> </div>	